

## 外来がん化学療法の処方に対する薬局薬剤師の着目点と課題

森山 京英<sup>1)</sup>、金井 良記<sup>2)</sup>、大熊 祐美<sup>3)</sup>、石黒 貴子<sup>4)</sup>、永野 悠馬<sup>5)</sup>、前田 守<sup>5)</sup>、  
長谷川 佳孝<sup>5)</sup>、月岡 良太<sup>5)</sup>、森澤 あずさ<sup>5)</sup>、大石 美也<sup>5)</sup>

- 1)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 三崎店
- 2)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 前橋店
- 3)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 板橋店
- 4)(株)アインファーマシーズ
- 5)(株)アインホールディングス

【目的】 がん治療は、経口抗がん剤や支持療法の進歩とともに外来治療へシフトしており、薬局薬剤師が抗がん剤の処方に応需する機会が増えている。したがって、安全かつ効果的な外来がん化学療法の実現に、薬局薬剤師が果たすべき役割の重要性が増している。そこで、外来がん化学療法の処方に対する薬局薬剤師の着目点を調査し、さらなる貢献に向けた課題を検討した。

【方法】 当社が関東甲信地方で運営する保険薬局 134 店舗に所属する病院勤務経験のない当社薬剤師 474 名を対象として、外来がん化学療法の処方監査時に注視する項目の調査を実施した。項目は「レジメン情報」「投薬・休薬スケジュール」「支持療法」「臨床検査値」「体表面積」「処方漏れの疑い」「副作用歴」「併用禁忌」「添付文書記載の用量用法」とし、注視の程度を 5 段階で評価した(アイングループ医療研究倫理審査委員会承認番号:AHD-0071)。

【結果】 471 名から有効回答を得た。注視の程度は、「投薬・休薬スケジュール」( $4.91 \pm 0.39$ , Mean  $\pm$  SD.)、「併用禁忌」( $4.91 \pm 0.35$ )、「添付文書記載の用量用法」( $4.83 \pm 0.51$ )、「副作用歴」( $4.82 \pm 0.49$ )、「処方漏れの疑い」( $4.45 \pm 0.81$ )、「レジメン情報」( $4.41 \pm 0.79$ )、「臨床検査値」( $4.40 \pm 0.75$ )、「体表面積」( $4.39 \pm 0.81$ )、「支持療法」( $4.34 \pm 0.81$ )の順に強いという結果であった。

【考察】 薬局薬剤師には「処方漏れの疑い」「レジメン情報」「臨床検査値」「体表面積」「支持療法」等のがん治療に関する項目より、「投薬・休薬スケジュール」「併用禁忌」「添付文書記載の用量用法」「副作用歴」等の薬剤の特徴を注視する傾向がみられた。したがって、薬局薬剤師はがん治療に関する知識の修得に努め、これらに関する項目も薬剤の特徴と同程度に注視できるようになることが必要であると考えられる。

(第 31 回医療薬学会年会(2021 年 10 月, Web)にて発表, 一部要約)